

2024 年度（令和 6 年度）
卒業生に対する
学修成果に関する調査報告

令和 7 年 4 月
志學館大学 学務委員会
志學館大学 IR室

1. 趣旨

学生が本学での4年間の学修の成果をどのように受け止めているかを調べるために、2024年度（令和6年度）卒業生全員を対象に、アンケート調査を実施した。

本学のディプロマ・ポリシー（以下、DPという。）とそれに基づくカリキュラムは、2018年度入学者より大幅に改定された。今回対象とした卒業生は、1年次からすでにスタートしていた新カリキュラムの下での教育を受けた学年であり、見方を変えると新カリキュラム4期生ということになる。なおこの間、各種IR報告をもとにした現行教育課程の検証結果を踏まえ、2023年度入学生からは、共通教育と専門教育の接続性を特に意識した新たな教育課程（当面の間、新新カリキュラムと呼ぶ。）がスタートしている。従ってこの新新カリキュラムの検証作業は、完成年度である2026年度以降に行うことになる（2026年度卒業生を含め、これ以降の卒業時アンケートが該当する）。

本報告において、特に断りのない場合、[]内の数値や記述は、卒業生に対して実施した過去の同様の調査（以下「2023調査」「2022調査」「2021調査」「2020調査」「2019調査」「2018調査」という）における値を示し、同順で直近のものから表記してある。

2. 資料と調査方法

アンケートの設問は14項目とした。これらの項目は、今回の調査対象である2024年度卒業生（2021年度入学生）の入学時のDPを基に6つのカテゴリーに分けられるので、DPカテゴリーと対応させて以下に示す。これらの項目は、2018調査以来、変えていない。このDPは、巻末に付録として示してある。ただし2023年度にDPの改定を行ったため、これに対応する形で、今回の2024調査で用いる設問は2つの設問（Q4とQ14）が修正されている。

DP1	Q1. 個性的かつ堅実な人間性、自主性、創造性
DP2	Q2. 人類の文化、社会と自然に関する教養
	Q3. 物事を科学的に、論理的に考える方法や力
	Q4. コンピュータの操作方法や情報技術
	Q5. コミュニケーションの能力
	Q6. 自ら学ぶことが楽しく、喜びであると感じる姿勢
DP3	Q7. 専門分野や所属する学科の専門知識や技能
	Q8. 総合的な問題発見能力や課題を解決する能力
DP4	Q9. 仕事や働くことの意味についての自分自身の考え
	Q10. 生涯にわたって学習を続けていく意思や力
DP5	Q11. 倫理観
	Q12. 地域社会の発展に貢献したいという気持ちや意識
DP6	Q13. 多様な言語・社会・文化に対する理解
	Q14. 多様な人々と共生・協働できる素地

各項目について、「大学でのさまざまな学修によって、設問の能力や知識を身につけたと感じているか」を問い、「4. 大変身についた」、「3. 身についた」、「2. 少しは身についた」、「1. 身につかなかった」の4つの選択肢から回答を求めた。

調査は、ユニバーサルパスポートシステムを用いて行った。なお、卒業式の日までに未回答であった者を対象として、付加・補完的に紙ベースの追加調査も行ったことに変更はない。

3. 分析結果

3.0 回答者の属性

評価対象者（卒業生）は319 [362, 335, 312, 295, 270, 256] 人（大学院除く）で、回答率は、98% [96%, 98%, 93%, 90%, 84%, 89%] で本調査開始以来、最も高くなった。未回答者は7名であった（表1）。学科ごとの回答率は、心理臨床学科（以下、心臨）99% [96%, 99%, 94%]、人間文化学科（以下、人文）100% [98%, 98%, 100%]、法律学科（以下、法律）95% [95%, 98%, 89%]、法ビジネス学科（以下、法ビ）98% [98%, 98%, 90%] であ

った。

回答の方法は学科間でやや相違はあるものの全体では、86% [74%, 84%, 82%, 80%] がユニパを通じて行っており、データ収集の方法としては妥当であった判断できる。前回 2023 調査ではユニパ経由の数が幾分低く、データ収集の効率化を図る観点から懸念もあったが、今回は例年を上回るほどに大幅に改善された。

これに対応して、紙ベースによる回答割合も低くなり、14% [20%, 15%, 11%, 10%] (心理臨 14% [20%, 17%, 8%, 10%], 人文 3% [9%, 4%, 16%, 2%], 法律 21% [18%, 18%, 9%, 12%], 法ビ 14% [40%, 14%, 19%, 16%])、無回答は 2% [4%, 2%, 7%, 10%] 7名であった(表1(補足))。紙ベースでの回答は、法律で若干増えているものの、その他では大幅に減少しており、特に前回多かった法ビでは例年並みに回復している。

各学科及び学士課程全体(以下「全学」という。)の学生の回答の平均値、標準偏差、最頻値を表2~15に示す。なお、以下の結果を理解するために、すべての回答の平均値は 3.24

[3.15, 3.15, 3.12, 3.12, 3.14]であったことに留意されたい。調査開始以降、ほぼ横ばいであったが、今回は一段高くなっている。

表1 調査対象及び回答者の数

学科	対象学生数	回答者数	回答率 (%)
心理臨床	133 [135, 134, 127, 111, 105, 97]	131 [130, 132, 120, 104, 103, 80]	99 [96, 99, 94, 94, 98, 82]
人間文化	58 [64, 57, 57, 52, 46, 40]	58 [63, 56, 57, 48, 40, 37]	100 [98, 98, 100, 92, 87, 93]
法律	84 [118, 101, 97, 87, 75, 68]	80 [112, 99, 86, 75, 49, 62]	95 [95, 98, 89, 86, 65, 91]
法ビジネス	44 [45, 43, 31, 45, 44, 41]	43 [44, 42, 28, 38, 31, 39]	98 [98, 98, 90, 84, 70, 95]
合計	319 [362, 335, 312, 295, 270, 246]	312 [349, 329, 291, 265, 226, 218]	98 [96, 98, 93, 90, 84, 89]

表1(補足) 学科別の回答方法の比較 (%)

学科	ユニパ	紙	無回答
心理臨床	85 [76, 81, 87, 84]	14 [20, 17, 8, 10]	2 [4, 2, 6, 6]
人間文化	97 [89, 95, 84, 90]	3 [9, 4, 16, 2]	0 [2, 2, 0, 8]
法律	75 [77, 80, 79, 75]	20 [18, 18, 9, 12]	5 [5, 2, 11, 14]
法ビジネス	84 [58, 84, 71, 69]	14 [40, 14, 19, 16]	2 [2, 2, 10, 16]
合計	84 [77, 84, 82, 80]	13 [20, 15, 11, 10]	2 [4, 2, 7, 10]

3.1 個性的かつ堅実な人間性, 自主性, 創造性 (Q1)

この設問は、本学の建学の精神に関連するもので、DP1に関連する（表2）。全学平均は3.4 [3.3, 3.3, 3.2, 3.2, 3.2, 3.0] で、今回最も高い設問の1つであった（他にはQ7）。2018年度の調査開始以降、わずかずつではあるが確実に上昇してきている。各学科の平均値は心臨3.4、人文3.4、法律3.3、法ビ3.3であった。最頻値は全学では4、心臨では3と4が同値で、その他は全て4であった。年度末データで行っているDP達成度の評価は、各DPに割り振られた科目の積算単位数で行っているが、DP1はDP2～DP6を束ねて評価するという形にしている。このためこの設問は、DP1を直接的に扱う数少ない機会の1つであり、学生の獲得実感といった観点から今後も注視していく必要がある。

表2 Q1に関する統計的代表値

Q1 学科	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.74)	3	3.1(.86)	3	3.2(.81)	3
人間文化	3.0(.76)	3	3.2(.59)	3	3.4(.65)	4
法律	3.0(.71)	3	3.3(.66)	3	3.3(.78)	4
法ビジネス	3.0(.79)	3	3.2(.76)	3	3.2(.64)	3
全学	3.0(.74)	3	3.2(.77)	3	3.2(.75)	3

Q1 学科	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.72)	3	3.2(.79)	3	3.3(.69)	3
人間文化	3.1(.74)	3	3.4(.75)	4	3.2(.68)	3
法律	3.3(.70)	3	3.4(.61)	3	3.4(.71)	4
法ビジネス	3.2(.63)	3	3.2(.77)	4	3.4(.62)	4
全学	3.2(.71)	3	3.3(.74)	3	3.3(.69)	3

Q1 学科	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.4(.64)	3, 4				
人間文化	3.4(.75)	4				
法律	3.3(.70)	4				
法ビジネス	3.3(.69)	4				
全学	3.4(.68)	4				

3.2 人類の文化、社会と自然に関する教養 (Q2)

この設問は、主に教養教育あるいは共通教育に関連するものである (表3)。なお、人間文化学科では、専門教育全体とも関連していると見なせる。

全学での平均値は3.2 [3.2, 3.1, 3.1, 3.1, 3.1, 2.9] で、学科間では、人文と法ビが3.3で高かったが、他2学科も3.2でほぼ差はない。例年心臨は低値に留まる傾向にあるが、今回は全学と同水準であった。最頻値は全学では4 [3] で、心臨と法律が3で、他2学科は4だった。学科間の差異は、2022調査でQ14と共に0.5以上の差異があり、前回2023調査でも0.3の差異があったが、今回は最小差異に留まっている。

表3 Q2に関する統計的代表的値

Q2 学科	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
	平均値 (SD)	最頻値	平均値 (SD)	最頻値	平均値 (SD)	最頻値
心理臨床	2.9(.75)	3	2.9(.83)	3	3.0(.85)	3
人間文化	3.1(.89)	3	3.1(.76)	3	3.4(.67)	4
法律	2.8(.75)	3	3.3(.71)	3, 4	3.1(.69)	3
法ビジネス	2.8(.76)	3	3.2(.72)	3	2.9(.74)	3
全学	2.9(.77)	3	3.1(.79)	3	3.1(.77)	3

Q2 学科	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
	平均値 (SD)	最頻値	平均値 (SD)	最頻値	平均値 (SD)	最頻値
心理臨床	3.0(.73)	3	3.0(.79)	3	3.1(.77)	3
人間文化	3.3(.73)	3	3.4(.75)	4	3.3(.60)	3
法律	3.1(.71)	3	3.1(.72)	3	3.4(.76)	4
法ビジネス	3.1(.81)	3	2.9(.75)	3	3.4(.65)	4
全学	3.1(.74)	3	3.1(.77)	3	3.2(.73)	3

Q2 学科	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
	平均値 (SD)	最頻値	平均値 (SD)	最頻値	平均値 (SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.77)	3				
人間文化	3.3(.83)	4				
法律	3.2(.77)	3				
法ビジネス	3.3(.79)	4				
全学	3.2(.78)	4				

3.3 物事を科学的に、論理的に考える方法や力 (Q3)

全学での平均値は3.2 [3.3, 3.2, 3.1, 3.1, 3.1, 3.0] で、学科間では法律が3.3で高く、人文が3.1で相対的に低いものの僅差と言える。最頻値は、法ビと全学が4、心臨が3と4、他2学科が3であった。2023調査で全学最頻値が初めて4になったが、この傾向は今回も継続している。学科間差異は0.2であった。

表4 Q3に関する統計的代表値

Q3 学科	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.0(.86)	3	3.0(.80)	3	3.1(.86)	3
人間文化	3.1(.88)	3	3.2(.75)	3	3.1(.79)	3
法律	3.0(.86)	3	3.3(.62)	3	3.2(.77)	3
法ビジネス	3.0(.84)	3	3.1(.83)	3	3.1(.71)	3
全学	3.0(.85)	3	3.1(.77)	3	3.1(.80)	3

Q3 学科	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.77)	3	3.2(.80)	3	3.2(.70)	3
人間文化	3.0(.78)	3	3.2(.90)	4	3.2(.79)	3
法律	3.1(.71)	3	3.2(.71)	3	3.4(.70)	4
法ビジネス	3.3(.66)	3	3.1(.71)	3	3.3(.69)	3
全学	3.1(.78)	3	3.2(.78)	3	3.3(.72)	4

Q3 学科	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.77)	3, 4				
人間文化	3.1(.83)	3				
法律	3.3(.75)	3				
法ビジネス	3.2(.82)	4				
全学	3.2(.78)	4				

3.4 コンピュータの操作方法や情報技術 (Q4)

全学での平均値は3.1 [3.0, 3.0, 3.0, 2.9, 3.0, 2.9] で、今回（相対的に）最も評価が低かった設問であり、この傾向は調査開始以降継続している（表5）。学科平均値2点台の学科がなくなっている（他に2021調査がある）ものの、14設問中ここだけ、学科最頻値4が出現していない。学科間差異は0.2であった。

表5 Q4に関する統計的代表的値

Q4 学科	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.0(.79)	3	2.9(.78)	3	3.1(.77)	3
人間文化	3.1(.74)	3	3.0(.82)	3	3.1(.78)	3
法律	2.9(.87)	3	3.0(.82)	3, 4	2.8(.89)	2
法ビジネス	2.8(.87)	2	3.1(.70)	3	2.7(.65)	3
全学	2.9(.82)	3	3.0(.78)	3	2.9(.80)	3

Q4 学科	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.0(.79)	3	3.0(.80)	3	2.9(.74)	3
人間文化	3.1(.79)	3	3.2(.77)	4	3.1(.71)	3
法律	3.0(.82)	2	2.9(.82)	3	3.1(.85)	4
法ビジネス	3.0(.88)	3	3.1(.66)	3	3.2(.77)	3
全学	3.0(.81)	3	3.0(.79)	3	3.0(.79)	3

Q4 学科	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.72)	3				
人間文化	3.1(.71)	3				
法律	3.0(.86)	2, 3				
法ビジネス	3.1(.71)	3				
全学	3.1(.76)	3				

3.5 コミュニケーションの能力 (Q5)

全学の平均値は、3.3 [3.3, 3.2, 3.2, 3.2, 3.2, 3.1] で、学科別では法ビが3.4と高く、人文が3.2で低かった。全ての学科及び全学で最頻値が4となった設問の1つである（他にQ11倫理観）。ただし2年連続は唯一であった。またこれまで学科間差異の大きな設問の1つであったが、今回は0.2に留まっており、学科間差異は大きくない。

表6 Q5に関する統計的代表値

Q5 学科	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.80)	3	3.0(.87)	3	3.0(.90)	4
人間文化	3.2(.78)	3	3.2(.71)	3	3.4(.84)	4
法律	3.0(.85)	3	3.6(.64)	4	3.4(.76)	4
法ビジネス	3.1(.90)	4	3.2(.67)	3	3.2(.65)	3
全学	3.1(.82)	3	3.2(.80)	4	3.2(.83)	4

Q5 学科	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.77)	3	3.2(.80)	3	3.3(.80)	4
人間文化	3.1(.75)	3	3.2(.88)	4	3.1(.85)	4
法律	3.2(.81)	4	3.3(.69)	3	3.4(.70)	4
法ビジネス	3.2(.83)	4	3.1(.88)	3,4	3.3(.71)	4
全学	3.2(.78)	3	3.2(.79)	4	3.3(.77)	4

Q5 学科	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.3(.76)	4				
人間文化	3.2(.80)	4				
法律	3.3(.79)	4				
法ビジネス	3.4(.66)	4				
全学	3.3(.76)	4				

3.6 自ら学ぶことが楽しく、喜びであると感じる姿勢 (Q6)

全学の平均値は3.3 [3.3, 3.2, 3.2, 3.3, 3.1] と、例年、平均値が高い設問のひとつであるが、今回はすべての設問が総じて高いため顕著性は低い。学科間差異は2020 調査で0.5と大きかったが、今回2024 調査では0.2 [0.2, 0.2, 0.2, 0.5] と4年続けて小さくなっている。心臨が3.4で最も高く、人文と法律が3.2だった。最頻値は全学と心臨、法律で4だった(表7)。

表7 Q6に関する統計的代表値

Q6 学科	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.84)	4	3.2(.78)	3	3.2(.76)	3
人間文化	3.2(.89)	4	3.3(.73)	4	3.4(.67)	3
法律	3.1(.76)	3	3.4(.73)	4	3.2(.75)	3
法ビジネス	3.2(.79)	3	3.1(.93)	4	2.9(.77)	3
全学	3.1(.81)	3	3.3(.78)	4	3.2(.75)	3

Q6 学科	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.70)	3	3.3(.79)	4	3.2(.78)	3
人間文化	3.2(.78)	3	3.3(.77)	4	3.3(.76)	4
法律	3.3(.76)	4	3.3(.67)	3	3.4(.72)	4
法ビジネス	3.1(.77)	3	3.1(.78)	3	3.3(.73)	3
全学	3.2(.74)	3	3.3(.75)	3, 4	3.3(.75)	4

Q6 学科	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.4(.68)	4				
人間文化	3.2(.80)	3				
法律	3.2(.80)	4				
法ビジネス	3.3(.67)	3				
全学	3.3(.73)	4				

3.7 専門分野や所属する学科の専門知識や技能 (Q7)

全学の平均値は3.4[3.4, 3.3, 3.3, 3.2, 3.3, 3.2] で、2021 調査から4年連続で最も高い項目の1つであった(今回は他にQ1)。学科別では、心臨と人文が3.4で高かったが、法律、法ビも3.4でいずれの学科も総じて高い。最頻値は、法ビで3で、他の学科と全学であった。

表8 Q7に関する統計的代表値

Q7 学科	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.3(.72)	4	3.2(.76)	4	3.2(.83)	4
人間文化	3.0(.82)	3	3.3(.72)	3	3.4(.74)	4
法律	3.2(.75)	3, 4	3.4(.73)	4	3.1(.85)	3, 4
法ビジネス	3.1(.83)	4	3.3(.78)	4	3.0(.72)	3
全学	3.2(.77)	3	3.3(.74)	4	3.2(.81)	4

Q7 学科	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.3(.70)	4	3.3(.75)	4	3.3(.69)	4
人間文化	3.2(.71)	3	3.4(.80)	4	3.5(.62)	4
法律	3.2(.75)	3	3.3(.71)	4	3.5(.70)	4
法ビジネス	3.3(.60)	3	3.1(.84)	4	3.4(.59)	3, 4
全学	3.3(.71)	3	3.3(.76)	4	3.4(.67)	4

Q7 学科	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.4(.66)	4				
人間文化	3.4(.65)	4				
法律	3.3(.75)	4				
法ビジネス	3.3(.67)	3				
全学	3.4(.69)	4				

3.8 総合的な問題発見能力や課題を解決する能力 (Q8)

この設問は、課題発見・解決型教育やアクティブラーニングに関連するものである (表9)。

平均値は、全学では3.2 [3.2, 3.2, 3.1, 3.1, 3.1, 3.0] で、この6年間で微増傾向にあり、1度も減少には転じていない。2023 調査では学科間差異が最大0.3あったが、今回は最小差異にとどまっている。最頻値は、人文だけ4で、その他の学科と全学は3であった。

表9 Q8に関する統計的代表値

Q8 学科	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	2.9(.75)	3	3.0(.76)	3	3.1(.81)	3
人間文化	3.0(.83)	3	3.1(.74)	3	3.2(.69)	3
法律	3.1(.78)	3	3.4(.69)	3	3.1(.88)	3
法ビジネス	2.9(.79)	3	3.3(.58)	3	3.1(.69)	3
全学	3.0(.78)	3	3.1(.73)	3	3.1(.79)	3

Q8 学科	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.70)	3	3.1(.76)	3	3.1(.68)	3
人間文化	2.9(.66)	3	3.2(.89)	4	3.1(.75)	3
法律	3.2(.68)	3	3.2(.67)	3	3.4(.66)	4
法ビジネス	3.2(.77)	3	3.0(.85)	3,4	3.4(.61)	3
全学	3.1(.70)	3	3.2(.77)	3	3.2(.69)	3

Q8 学科	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.76)	3				
人間文化	3.3(.75)	4				
法律	3.3(.65)	3				
法ビジネス	3.3(.70)	3				
全学	3.2(.72)	3				

3.9 仕事や働くことの意味についての自分自身の考え (Q9)

この設問は、主にキャリア教育及び職業観の涵養に関連するものである（表 10）。平均値は、全学では 3.3 [3.3, 3.3, 3.2, 3.3, 3.2, 3.1] で、2023 調査に引き続き 2 年連続で法律と法ビが 3.4 で高く、心臨と人文が 3.2 で相対的に低かった。最頻値は、人文だけ 3 で他の学科と全学は 4 だった。

表 10 Q9 に関する統計的代表的値

Q9 学科	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.83)	3	3.1(.83)	4	3.2(.86)	4
人間文化	3.1(.88)	3	2.9(.84)	3	3.3(.69)	3, 4
法律	3.1(.85)	4	3.6(.61)	4	3.4(.67)	4
法ビジネス	3.3(.85)	4	3.4(.66)	3, 4	3.3(.69)	3
全学	3.1(.84)	4	3.2(.79)	4	3.3(.76)	4

Q9 学科	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.84)	4	3.2(.85)	4	3.3(.70)	3
人間文化	3.0(.88)	3	3.2(.89)	4	3.2(.85)	4
法律	3.3(.86)	4	3.4(.63)	3	3.4(.74)	4
法ビジネス	3.3(.82)	4	3.1(.83)	3, 4	3.4(.66)	4
全学	3.2(.85)	4	3.2(.79)	4	3.3(.74)	4

Q9 学科	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.80)	4				
人間文化	3.2(.78)	3				
法律	3.4(.65)	4				
法ビジネス	3.4(.67)	4				
全学	3.3(.75)	4				

3.10 生涯にわたって学習を続けていく意思や力 (Q10)

この設問は、生涯学習能力の涵養に関連するものである（表 11）。平均値は、全学で 3.3 [3.3, 3.2, 3.2, 3.1, 3.2, 3.1] でこの 7 年間で微増傾向にあることに変わりはない。学科別では 2024 調査から引き続き、法律が 3.4 と高く、人文が 3.2 で低かった。最頻値は、全学が 4、人文と法ビが 3 だった。

表 11 Q10 に関する統計的代表的値

Q10 学科	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.85)	3	3.2(.80)	3	3.2(.83)	4
人間文化	3.1(.88)	3	3.3(.75)	4	3.3(.68)	3
法律	3.0(.86)	3	3.4(.67)	4	3.2(.81)	4
法ビジネス	3.2(.94)	4	3.2(.78)	3	3.1(.71)	3
全学	3.1(.87)	4	3.2(.76)	3	3.2(.78)	3

Q10 学科	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.2(.74)	3	3.2(.80)	4	3.2(.71)	3
人間文化	3.1(.72)	3	3.2(.90)	4	3.3(.71)	3
法律	3.1(.81)	3	3.3(.70)	3,4	3.4(.76)	4
法ビジネス	3.2(.74)	3	3.1(.89)	4	3.3(.67)	3
全学	3.2(.76)	3	3.2(.80)	4	3.3(.72)	3,4

Q10 学科	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.3(.70)	3,4				
人間文化	3.2(.82)	3				
法律	3.4(.68)	4				
法ビジネス	3.3(.76)	3				
全学	3.3(.73)	4				

3.11 倫理観 (Q11)

平均値は、全学で3.3 [3.4, 3.3, 3.2, 3.2, 3.2, 3.0] , 人文で3.2, その他の学科は3.4だった。調査開始以降、連続で微増傾向にあったが、今回はわずかにだが減少に転じた。しかしながら、最頻値はすべての学科と全学で4で、2024調査ですべて4だった設問は他にはない。

表 12 Q11に関する統計的代表値

Q11 学科	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.0(.90)	3	3.2(.81)	3	3.2(.82)	4
人間文化	3.1(.88)	3	3.1(.67)	3	3.1(.78)	3
法律	2.9(.83)	3	3.2(.62)	3	3.2(.76)	3
法ビジネス	3.0(.78)	3	3.3(.68)	3	3.1(.70)	3
全学	3.0(.85)	3	3.2(.73)	3	3.2(.78)	3

Q11 学科	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.3(.75)	4	3.2(.83)	4	3.3(.70)	3
人間文化	3.1(.81)	3	3.4(.71)	4	3.3(.70)	3
法律	3.2(.74)	3,4	3.3(.69)	4	3.5(.55)	4
法ビジネス	3.3(.70)	3	3.1(.84)	3	3.4(.57)	3
全学	3.2(.76)	3	3.3(.77)	4	3.4(.66)	4

Q11 学科	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.4(.70)	4				
人間文化	3.2(.83)	4				
法律	3.4(.70)	4				
法ビジネス	3.4(.63)	4				
全学	3.3(.72)	4				

3.12 地域社会の発展に貢献したいという気持ちや意識 (Q12)

平均値は、全学で3.3 [3.2, 3.1, 3.1, 3.2, 3.1, 3.0] で大きな変化はない (表13)。学科別では法律が3.4で最も高く、心臨と法ビが3.3、人文3.2であった。法律は2019調査以降、6年連続で、学科間で最も高い値を続けている。最頻値は全学が3、心臨と法律が4、人文が3と4が同値、法ビが3だった。

表13 Q12に関する統計的代表値

Q12 学科	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	2.9(.87)	3	3.0(.93)	3	3.0(.89)	3
人間文化	3.1(.86)	3	3.0(.77)	3	3.2(.83)	3
法律	3.0(.79)	3	3.3(.72)	4	3.3(.77)	4
法ビジネス	3.1(.87)	3	3.2(.82)	3	3.3(.86)	4
全学	3.0(.84)	3	3.1(.85)	3	3.2(.84)	4

Q12 学科	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.78)	3	3.1(.90)	3	3.1(.78)	3
人間文化	3.1(.81)	3	3.2(.85)	4	3.2(.87)	4
法律	3.2(.88)	4	3.2(.81)	4	3.4(.73)	4
法ビジネス	3.3(.70)	3	3.1(.89)	4	3.3(.76)	4
全学	3.1(.81)	3	3.1(.86)	4	3.2(.78)	4

Q12 学科	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.3(.75)	4				
人間文化	3.2(.88)	3, 4				
法律	3.4(.73)	4				
法ビジネス	3.3(.65)	3				
全学	3.3(.77)	3				

3.13 多様な言語・社会・文化に対する理解 (Q13)

この設問は、異文化理解、多文化共生と呼ばれる領域に関連するものである（表 14）。全学の平均値は 3.2 [3.2, 3.1, 3.1, 3.0, 3.2, 2.9] であり、2019 調査で大きく上昇して以降、微増傾向にある。学科別では、人文が 3.4 で高く、心臨が 3.1 で低い。人文が高く、心臨が低い傾向は、連続でこそないものの、一貫してたびたび出現している。最頻値は人文と法ビ 4、他の学科と全学が 3 であった。

表 14 Q13 に関する統計的代表値

Q13 学科	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	2.8(.89)	3	3.1(.89)	4	2.9(.89)	2
人間文化	3.2(.83)	4	3.2(.74)	3	3.4(.68)	4
法律	3.0(.80)	3	3.2(.77)	3	3.0(.82)	3
法ビジネス	3.0(.81)	3	3.3(.79)	4	2.8(.92)	3
全学	2.9(.85)	3	3.2(.82)	3,4	3.0(.86)	3

Q13 学科	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.0(.72)	3	3.0(.85)	3	3.0(.82)	3
人間文化	3.1(.73)	3	3.4(.68)	4	3.3(.72)	4
法律	3.1(.82)	3	3.1(.77)	3	3.2(.80)	4
法ビジネス	3.0(.92)	3	3.0(.78)	3	3.3(.71)	4
全学	3.1(.77)	3	3.1(.80)	3	3.2(.79)	4

Q13 学科	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.1(.78)	3				
人間文化	3.4(.74)	4				
法律	3.2(.79)	3				
法ビジネス	3.3(.68)	4				
全学	3.2(.77)	3				

3.14 多様な人々と共生・協働できる素地（国際人として活躍する素地）

この設問は、いわゆるグローバル人材育成に関連するものである（表 15）。全学の平均値は 3.3[2.8, 2.7, 2.7, 2.6, 2.8, 2.6] で、調査開始以降、初めて 3 点台となった。これは冒頭で記したとおり、2023 年度 DP 改正を受け、Q14 を「多様な人々と共生・協働できる素地」に変更したせいであることは明らかである。この点については後段で述べる。

またこの意味で、過去データとの比較は意味を持たないが、いずれの学科の平均点も過去最高であった。最頻値は、人文だけが 3 で、他の学科と全学は 4 で、これまで連続して出現していた最頻値 2 はなくなった。全設問中最も大きかった標準偏差も、他の設問なみに収まり、獲得実感の個人差も相対的に減少している。

表 15 Q14 に関する統計的代表値

学科	2018 調査		2019 調査		2020 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	2.4(1.03)	2	2.5(.99)	2	2.5(.96)	2
人間文化	2.9(.95)	3	2.8(.78)	3	2.9(.89)	3
法律	2.6(.99)	2	2.9(.90)	3	2.7(.94)	2
法ビジネス	2.7(.85)	3	3.0(.78)	3	2.6(.89)	3
全学	2.6(.99)	3	2.8(.93)	3	2.6(.94)	3, 4

学科	2021 調査		2022 調査		2023 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	2.7(.85)	2	2.6(.96)	2	2.5(.84)	2
人間文化	2.8(.94)	3	3.1(.96)	4	2.9(.87)	2, 3
法律	2.7(.92)	2, 3	2.7(.93)	3	3.1(.94)	4
法ビジネス	2.7(1.01)	3	2.8(.93)	2	3.1(.90)	3
全学	2.7(.90)	3	2.7(.96)	2	2.8(.92)	3

学科	2024 調査		2025 調査		2026 調査	
	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値	平均値(SD)	最頻値
心理臨床	3.3(.70)	4				
人間文化	3.2(.79)	3				
法律	3.4(.71)	4				
法ビジネス	3.3(.69)	4				
全学	3.3(.72)	4				

4. まとめ

4.1 設問項目ごとの結果のまとめ

本調査を通じて、DPに掲げる教育達成目標の実現度を学生がどのように感じているか、ある程度浮き彫りにできたと考える。

本調査では、全回答数 4365 [4886, 4606, 4074, 3710, 3162, 3052] のうち、43% [42%, 39%, 36%] が選択肢 4 を占めた。例年最も多かった選択肢 3 は 41% [41%, 41%, 44%, 41%, 43%, 41%] であった。この傾向は 2023 調査で初めて出現し、今回で 2 年連続である。

また設問ごとの全学の平均値は、過去 6 カ年は 3.0 ± 0.3 程度にあったが、今回 2024 調査では Q4 を除く全ての設問が 3.2 ± 0.1 の範囲にあり、全体的に得点が上がり、設問間差異が小さくなっている。最も低かった Q4 (コンピュータ) でも平均は 3.1 で、過去最高値である。設問ごとの学科間の差異は、0.3 の設問が消え、0.2 が最大となった。特に 2023 調査で 0.6 あった Q14 (旧国際人) の学科間差異は、0.2 まで減少している。

全学で平均値が高く (2024 基準 3.3 以上)、全学最頻値 4、学科最頻値 4 が多い (2024 基準 3 以上) 設問は、学生の達成感が高いと判断した。この群には、2019 調査では「自ら学ぶ姿勢 (Q6)」「専門知識や技能 (Q7)」「職業観 (Q9)」が、2020 調査では「コミュニケーション能力 (Q5)」「専門知識や技能 (Q7)」「職業観 (Q9)」「地域貢献意識 (Q12)」が入っていた。2021 調査では「職業観 (Q9)」だけであったが、2022 調査では「専門知識や技能 (Q7)」「生涯学習能力 (Q10)」「倫理観 (Q11)」「地域貢献意識 (Q12)」の 4 項目が入った。2023 調査では、「コミュニケーション能力 (Q5)」「専門知識や技能 (Q7)」「職業観 (Q9)」「地域貢献意識 (Q12)」「異文化等の理解 (Q13)」の 5 項目が入った。今回 2024 調査では、「コミュニケーション能力 (Q5)」「専門知識や技能 (Q7)」「職業観 (Q9)」「地域貢献意識 (Q12)」が例年通り入り、これに加えて、「DP1 (Q1)」と「倫理観 (Q11)」、「多様な人々との共生・協働 (Q14)」が入ってきた。調査回により多少の出入りはあるが、Q5 や Q7, Q9, Q12 などは安定的に出現している。2022 調査で初めてこの群に入った「倫理観 (Q11)」は、前回 2023 調査でわずかに外れたが、今回はまた戻っており、全学的に達成感の高い観点と判断出来る。また「多様な人々との共生・協働 (Q14)」は、これまでは達成感の低い群の代表例であったが、問いかけ方を変更した結果、実態に即した評価が出来るようになったと解するべきだろう。

さらに「DP1 (Q1)」がこの群に入ってきたことは特筆すべき事だろう。本学の学位プログラムでは、DP1 に直接的、明示的に紐付けている科目は置いておらず、DP2 から DP6 の達成を束ねて DP1 の獲得を目指す構造を取っている。4 年間の学びを経た後、学生の獲得実感として、DP1 に対応する Q1 に対する評価が高いことは、3 つのポリシーを基点とする教育の質保証、あるいは教育課程の編成・実施とその評価方法が、一定の有効性を有していることを示唆していると考えられる。今後の推移に注目していきたい。

一方、回答の傾向が上記と逆の場合 (全学平均低 (2024 基準 3.2 未満)、全学最頻値が 4 ではない、学科最頻値 4 が少ない) は、達成感が低いと判断できる。これには、前回 2023 調査では「コンピュータ・情報 (処理) 技術 (Q4)」と「(旧) 国際人として素地 (Q14)」が当てはまり、Q14 は過去 5 カ年連続であったが、今回は「コンピュータ・情報技術 (Q4)」だけであった。先述の通り、Q4 は 4 学科とも最頻値 3 で、全学平均が 3.1 である。この結果が本質的なのか、あるいは Q14 にあった問題と同様の構造を有するのか、検討する必要がある。

回答平均値の学科間での差が小さく (平均値で 0.1 程度)、全学での標準偏差が大きくない設問は、比較的全学一様な教育になっていると判断した。2020 調査では「科学的論理的思考力 (Q3)」「問題発見・解決能力 (Q8)」「倫理観 (Q11)」が、2021 調査では「コンピュータ・情報処理技術 (Q4)」「コミュニケーション能力 (Q5)」「専門知識や技能 (Q7)」「生涯学習能力 (Q10)」「異文化等の理解 (Q13)」が、2022 調査ではこの群に「科学的論理的思考力 (Q3)」「地域貢献意識 (Q12)」がこの基準にあったが、ほとんど一貫性は見られていなかった。前回 2023 調査では、この基準に落ちる設問はなく、学科間の差異は全て 0.2 以上であった。今回は「DP1 (Q1)」「人類の文化、社会と自然に関する教養 (Q2)」「専門知識や技能 (Q7)」「問題発見・解決能力 (Q8)」が当てはまる。

一方、逆の場合 (学科間の差が大きく (平均値で 0.5 以上)、全学での標準偏差が大き) は、学生の達成感に学科間での差が大きかったと言える。2020 調査では「人類の文化、社会と自然に関する教養 (Q2)」「自ら学ぶ姿勢 (Q6)」「異文化等の理解 (Q13)」が、2021 調査では (学

科間差異 0.3 以上基準で) 「人類の文化, 社会と自然に関する教養(Q2)」 「科学的論理的思考力(Q3)」 「問題発見・解決能力(Q8)」 「職業観(Q9)」が, 2022 調査では「人類の文化, 社会と自然に関する教養(Q2)」 「(旧)国際人の素地(Q14)」が, 2023 調査では「国際人の素地(Q14)」が入っていた。今回はこの基準に合致する設問はなく, 学科間差異は最大で 0.2 に留まり, 前回 0.6 あった Q14 も, 「多様な人々との共生・協働(Q14)」に変更したことにより, 0.2 であった。

4.2 学科平均値の比較による各学科の特色

2024 調査における各学科の特色は, 次の通りである。

(心理臨床学科)

心臨学科は, 前回 2023 調査では総じて低位であったが, 今回は学科間の比較で最高位となった設問が 5 つ, 最頻値 4 の設問が 7 つで, 目立った低さはなくなった。特に「コンピュータの操作方法や情報技術(Q4)」は前回の平均点は最低位で 2 点台だったが, 今回は 3.2 と最高位になっている。その他最高位となった設問には「DP1(Q1)」 「自ら学ぶ姿勢(Q6)」 「専門知識や技能(Q7)」 「倫理観(Q11)」がある。最低位になった設問はなかった。

(人間文化学科)

2022 調査での人文はいずれの評価軸においても突出して高く, 2023 調査では相対的に低位に留まっていた。今回は学科間比較で最高位となった設問が 5 つ, 最頻値 4 の設問が 7 つと心臨と同じであった。特に「異文化等の理解(Q13)」は 3.4 と飛び抜けて高く, これまでの傾向が持続している。その他最高位となった設問には「DP1(Q1)」 「人類の文化, 社会と自然に関する教養(Q2)」 「専門知識や技能(Q7)」 「問題発見・解決能力(Q8)」がある。逆に「科学的論理的思考力(Q3)」は最低位で, 獲得実感は相対的に低く出ている。

(法律学科)

前回 2023 調査では法律の高さが顕著であったが, 今回も平均点が最高位の設問が 7 つ, 最頻値 4 が 10 で, それぞれ 4 学科中最も多く, 法律の獲得実感の高さが強く出ている。平均点が高かった 7 つ設問の内, 5 つ(「科学的論理的思考力(Q3)」 「問題発見・解決能力(Q8)」 「生涯学習能力(Q10)」 「地域貢献意識(Q12)」 「多様な人々との共生・協働(Q14)」)が単独で最高位であった。言うまでもなく, 法律の学生の多数がこれらの観点について「大変身について」と感じていることになる。その他の設問も高く評価されているが, 「コンピュータ・情報技術(Q4)」だけは 3.0 と学科間比較では最低位で, 最頻値も 2 と 3 同値であったことが特異的である。

(法ビジネス学科)

2022 調査では, 法ビは学科間比較で最高位となった観点がなく, 最低位となった観点は 14 観点中 12 であったが, 前回 2023 調査では, 最高位となった観点が 7 つ, 最低位となった観点はなかった。今回は最高位となった設問は 5 つ, 最頻値 4 が 7 つで, 心臨及び人文と同じであった。前々回 2022 調査で 3.0 を下回って目立って低かった「人類の文化, 社会と自然に関する教養(Q2)」は, 前回 2023 では法律と並んで最高位で 3.4 となっていたが, 今回は人文と並んで 3.3 でやはり最高位だった。また心臨と同じように, 最低位となった設問がないことが特徴としてあげられる。

(全学)

あらためて 2024 調査の全学での傾向を見てみると, 2023 調査に比して, 全学の平均値は 14 観点中 1 つを除き, 同値か, わずかながら増加しており, 減少した観点はなかった。このトレンドは 4 年連続だが, 「倫理観(Q11)」は 3.4 から 3.3 に減少したが, 現時点では誤差の範囲と推量する。以後の推移で見極めたい。

また学科間の平均値の差異は, 今回は最大で 0.2 [0.6, 0.5, 0.3, 0.6] であり, 差異 0.3 を基準に取れば 1 つもない [7 つ, 7 つ, 4 つ]。このうち特に「人類の文化, 社会と自然に関する教養(Q2)」は過去 4 年連続で学科間差異の大きな観点であったが, 今回は 0.1 となり, 差異が目立つ観点ではなくなっている。前回まで 2 年連続で 0.5 を超える学科間差異のあった「(旧)国際人の素地(Q14)」は, 今回 0.2 となった。

平均値が相対的に高く (3.2 以上), 最頻値が 4 となっている学科が多い (3 以上) 観点は, 2020 調査及び 2021 調査では「コミュニケーション能力(Q5)」 「専門知識や技能(Q7)」 「職業観(Q9)」 「地域貢献意識(Q12)」の 4 つ, 2022 調査では「専門知識や技能(Q7)」 「生涯学習能力(Q10)」 「倫理観(Q11)」 「地域貢献意識(Q12)」の 4 つ, 2023 調査では, 「コミュニケーション

能力(Q5)」「専門知識や技能(Q7)」「職業観(Q9)」「地域貢献意識(Q12)」「異文化等の理解(Q13)」の5つであった。今回2024調査ではQ4, Q6, Q8, Q10, Q13を除く9観点がこれを満たし、これらの観点は、調査回により観点の出入りがあったとしても、DPを束ねて本学が重視してきた部分と概ね合致していると言える。

全学的に学生の獲得感が得られていない観点(3.0以下)は、過去4年連続して「コンピュータ・情報(処理)技術(Q4)」と「(旧)国際人の素地(Q14)」の2つであった。このうち「コンピュータ・情報処理技術(Q4)」は5年連続、「国際人の素地(Q14)」にあつては6年連続であったが、今回2024調査では、いずれもこの群から外れ、該当する設問はなくなった。

このように今回は、全体的に高評価が得られているため、例えば全学最頻値3以下の設問などには見劣りする印象を受ける。これには「コンピュータ・情報技術(Q4)」「問題発見・解決能力(Q8)」「異文化等の理解(Q13)」が該当するが、これらの観点は平均点3以上で、その獲得を概ね実感されていることには留意しておくべきであろう。

その上で、これらの観点では本学の教育は学生に十分なインパクトを与えることができていないと捉え、今後の各種教育プログラムの検討においては、念頭に置いておく必要もあるだろう。ただし、相対的に評価の低かった「コンピュータ・情報技術(Q4)」については、2023年度にICTを利活用した全学的な教育改善の動きが始動して、今後の高度化も期待できるため、その効果が出始めるのを待ちたい。

4.3 DP項目ごとの受け止め方

各設問の回答を、6つのDPカテゴリ別にまとめて分布を調べた。図7に今回の[2024調査]結果を示し、図1から図6は順に過去の調査結果である。

これまでの調査結果では、各DPの分布の形は2つのグループに分けることができた。1つは3にモードを持ち、左に裾を引くもの(Aグループ)と今ひとつは3及び4にモードを持つもの(Bグループ)である。典型的にはDP1, DP2, DP3, DP6がグループAで、DP4, DP5がグループBである。

これまでの変化をまとめると、DP5は[2019調査]及び[2018調査]ではグループAであったが、[2020調査]ではグループBに近くなり、[2021調査]ではDP4とほぼ同型で、グループBに含まれるようになった。DP6は大きく分けるとグループAだが、その中でも幾分異なり、全体的なピークが低く、2と1の比率が比較的高い。[2022調査]ではDP1とDP3がグループBに近くなり、グループAに分類できるのはDP2とDP6となっているところが特徴的であった。

[2023調査]では、グループAに分類されていたDP2がグループBにより近くなり、DP6もわずかにその特徴を残すのみとなっている。従って、6つのDPのほとんどが、グループBの特徴を持つようになってきている点が特徴的である。

今回2024調査では、前回同様に、明確に3にモードを持つグループAはなくなり、全てグループBの特徴を有するようになったと見て良いだろう。ただし今回の各DPの分布の形からは、グループBに加え、新たなグループ(4にモードを持ち、左に裾を引くもの)の存在を指摘できる。これをグループCとするなら、典型的にはDP1, DP4, DP5がこれに当たる。

獲得実感の経時的変化を発達の視点で捉えるなら、これまでの推移上も論理的にも、グループA→B→Cの順序性を想定でき、この意味でグループCが大学として目指すべき姿となる。これまで継続的に高かったDP4「職業観を持ち生涯学習し続ける能力を有している」とDP5「倫理観を持った市民として地域社会の発展に貢献する高い意識を持っている」はグループCで、今回DP1「個性的かつ堅実な人間性、自主性、創造性」が加わった。DP2「豊かな教養と科学的論理的思考法、情報技術、コミュニケーション能力を身につけ、自ら学ぶことの喜びを知っている」とDP3「専門的知識・技能と総合的な問題発見・課題解決能力を持っている」は2年連続でグループBに含まれ、今回DP6「世界の言語・社会・文化を理解し、多様な人々と共生・協働できる素地を持っている」も加わった。DP6については、2023年度のDP改訂を受けた質問内容の変更によるものであることが間違いない。

4.4 本学の個性・特色の反映等

上記の結果から、これまでの調査結果に引き続き、本学がその個性・特色として標榜している事項の中で、「学生の社会参画意識を育む大学」、「地域とともに歩む大学」、倫理観に関連する

「コンプライアンスと誠実性」については学生が獲得できたと感じていると評価できる。また教養教育と関連する「人間力教育」は高まりつつある様子を見て取れる。

平成20年度中教審答申が提起した「学士力」の中で、専門分野に関わらず求められている、「汎用的技能」のうち、「コミュニケーション・スキル」「論理的思考力」は得られたとしているが、「情報リテラシー」「問題解決力」が得られたかについては、全学的には波及しているとまでは評価できない。

5. 結語

この調査は大学4年間の学びを通じた、卒業時の「成長実感」，「能力獲得実感」を問うている。緒言にて示したとおり、2024卒業生は現在のDPの下で編成されたカリキュラムで4年間の教育を受けた、新カリキュラム4期生である。2018入学生から適用された新カリキュラムの構成理念の1つは、大学・学部共通の専門科目というカテゴリーを設け、大学の教育目的のメッセージ性を持った科目を置き、DPとの整合性を取りやすくするといったことがあった。例えば両学部共に「倫理学概論」「哲学概論」を学部基礎科目群に置き、大学の教育目的に該当する科目として位置づけている。2022調査で大きく「成長実感」できた観点に、初めて「倫理観(Q11)」が入ったが、2023調査で「倫理観」の全学平均値は最高位となり、今回2024調査でもこの傾向は継続している。これらから、2018カリキュラム設置のねらいの一端は達成できたと評価できるだろう。

学科間差異が大きい項目と判断できる項目は、2021調査では、0.3以上差異基準で4観点、2022調査では7観点あり、そのうち2つ(Q2, Q14)は0.5以上の差異があった。2023調査では、同差異基準(0.3以上)で、やはり7観点あり、そのうち1つ(Q14)は0.5以上の差異があった。しかしながら今回2024調査では、学科間差異は最大でも0.2であった。加えて、2022調査では特に法ビの低さが目立ったり、2023調査では「法高人低(法律と法ビが高く人関が低い)」傾向が示されたりと、学科による相違が顕著に検出されてきたが、今回2024調査では、顕著な学科による違いは示されていない。今後の推移に注目したい。

また法学部では、今回対象となった2024年度卒業生は、2020年度入学生より導入した入学後の学科分属制度(レイトスペシャライゼーション)のもとで教育を受けた2期生である。前段で述べた通り、前回は法学部の高さが目立ったが、今回は法律の高さが顕著であった。この点についても今後の推移を注意深く見ていきたい。

さらに、既に述べた通り、2023年度入学生からは新新カリキュラムがスタートしている。この新新カリキュラムでは、特に共通教育と専門教育の連続性、換言すれば現代的な教養教育の充実に力点が置かれている(その他、共通と専門の区分を問わない18単位設置や人関では「卒業論文4単位」廃止など)。こういった新しく適用される教育プログラムの適切性や効果性の評価は、決して容易なことではなく、本来的には多面的に判断されなければ成らないものであろうが、この調査が扱っている学習者自身の「獲得実感」といった側面は、その本道からはそう遠くないところにあるだろう。いずれにしても、以後、質問項目を維持しつつ継続的にモニタリングを続け、従前の結果との比較等を行うことで、本学の教育の成果と達成度に関する貴重な資料が得られると考える。

最後に、2024調査の回答率は調査開始以降最高の97.9%で、未回答者はわずか7名であった。回答に協力してくれた2024年度卒業生及び回答率向上に尽力頂いた関係各所に記して謝意を表したい。

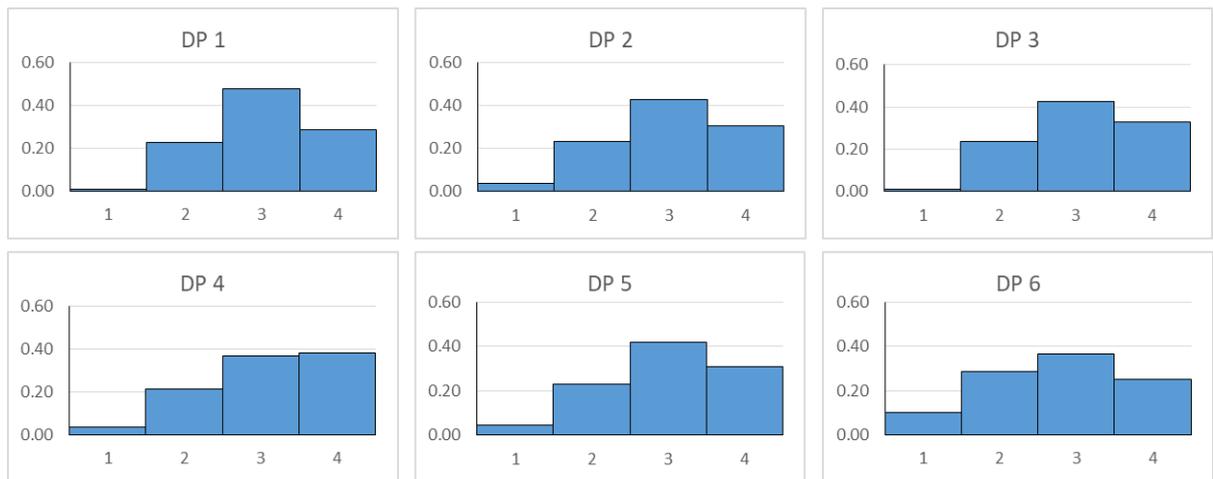


図1 [2018 調査]

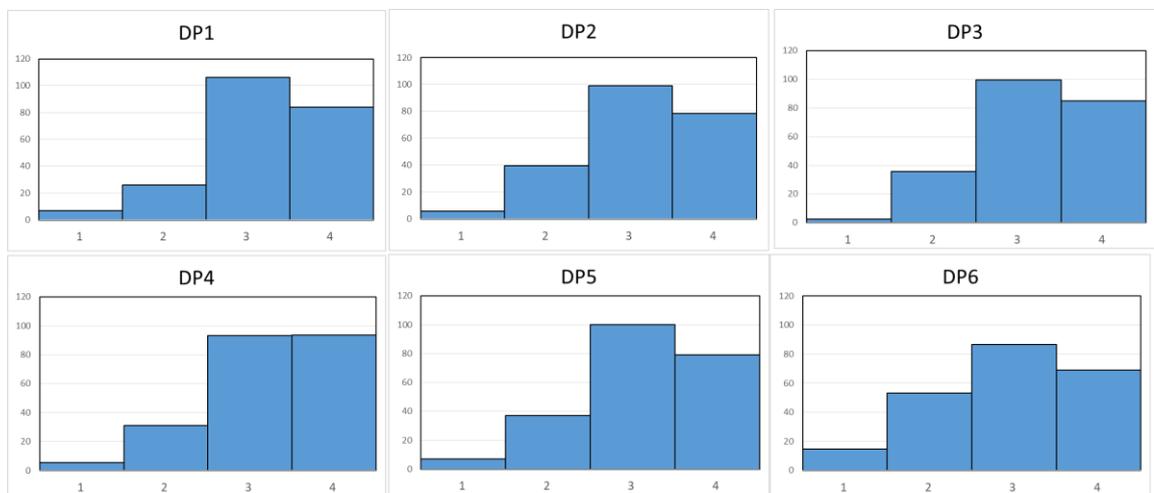


図2 [2019 調査]

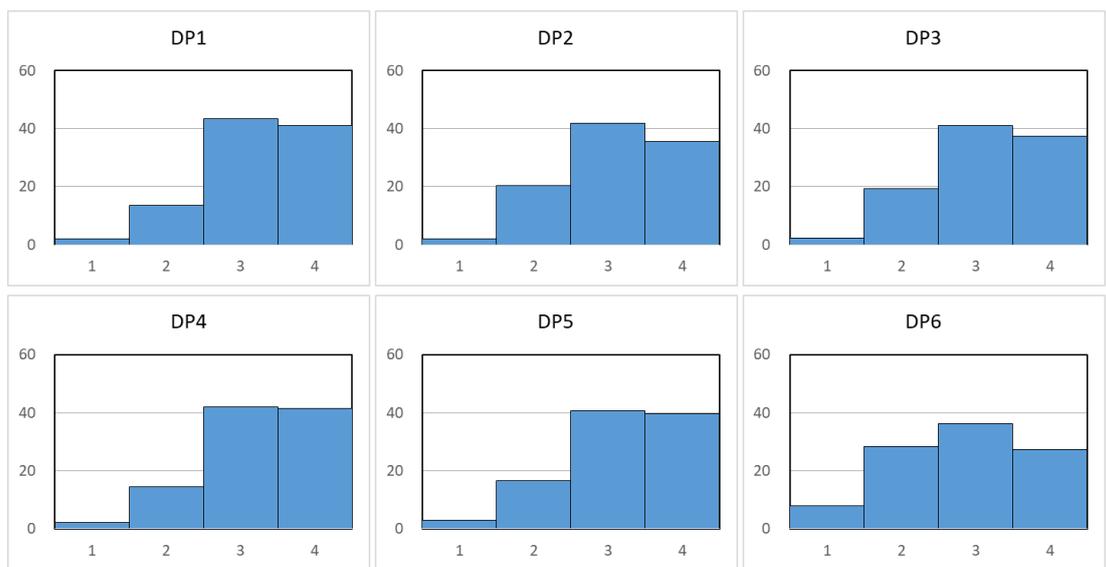


図3 [2020 調査]

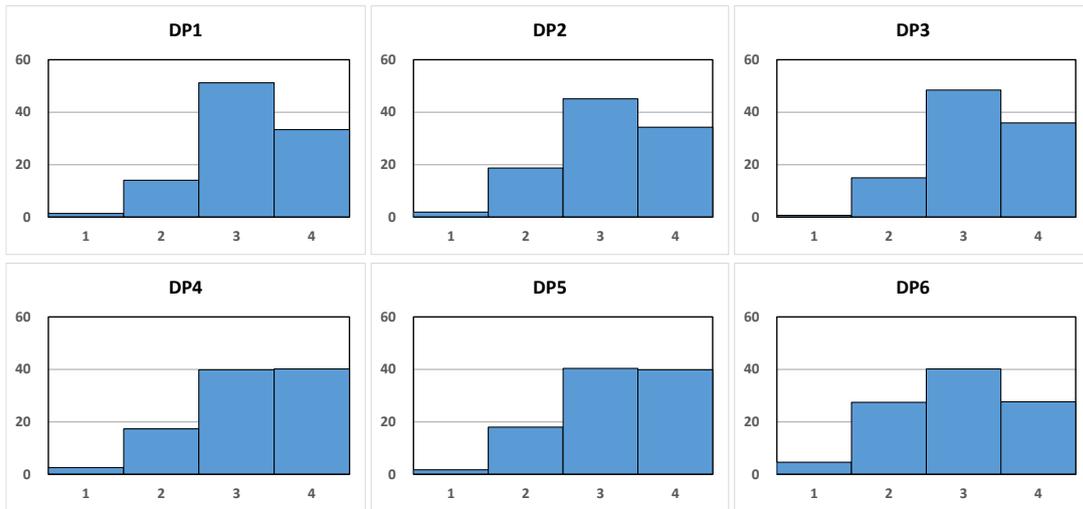


図4 [2021 調査]

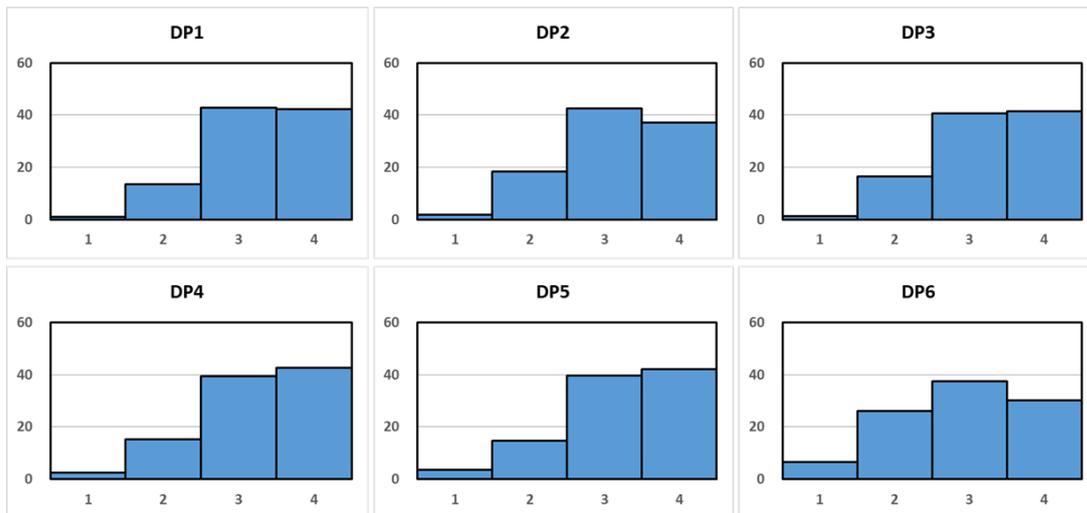


図5 [2022 調査]

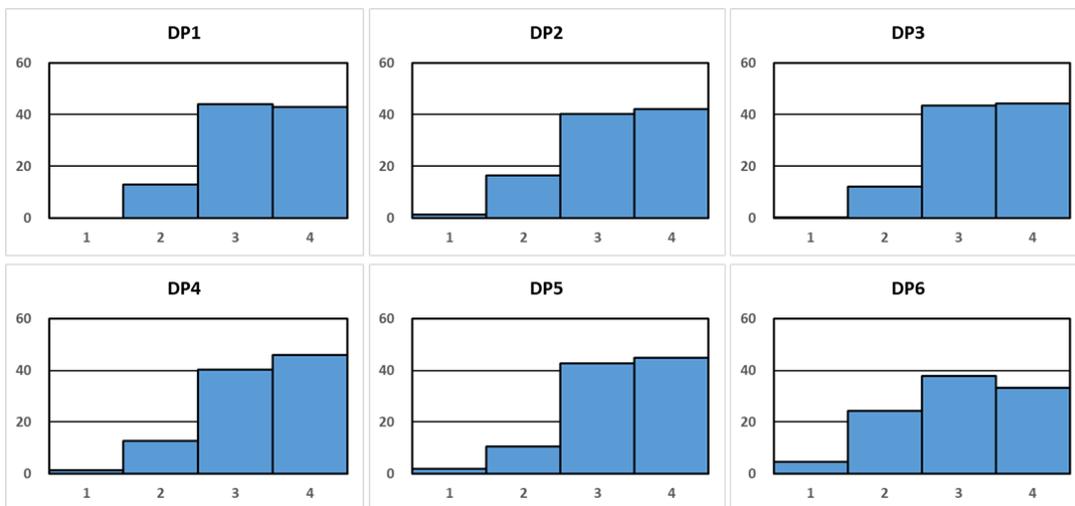


図6 [2023 調査]

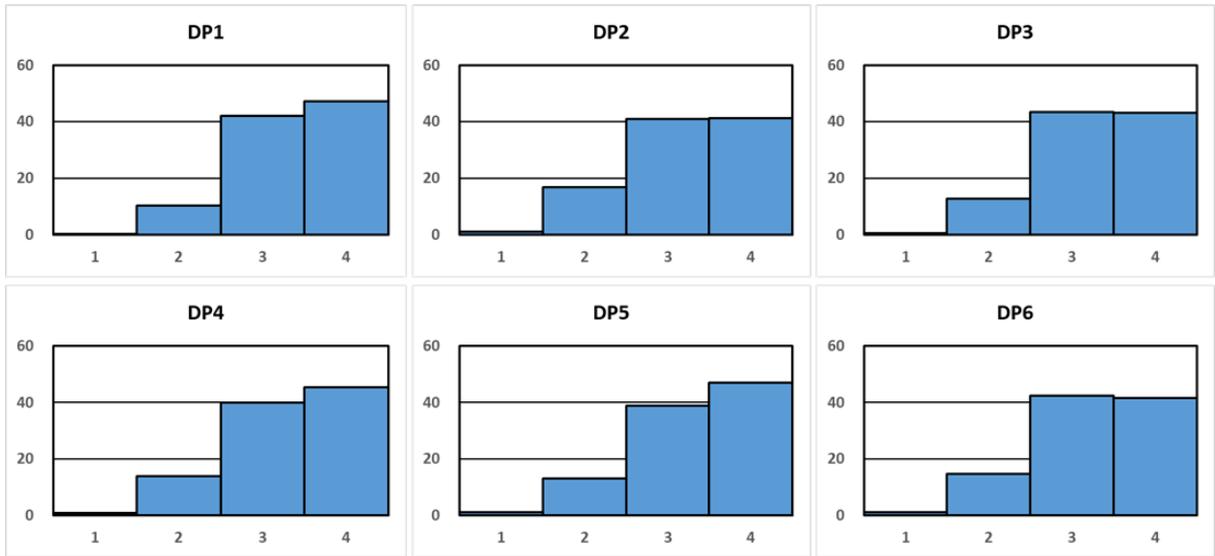


図 7 [2024 調査]

【付録】

志學館大学のディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）（2022年度まで）

本学は建学の精神「時代に即応した堅実にして有為な人間の育成」に従い、その教育目標を実現することを目指し、以下に掲げる資質・能力を修得した者に学士の学位を授与します。

- 1 個性的かつ堅実な人間性，自主性，創造性が身についている。
- 2 人類の文化，社会と自然に関する豊かな教養と科学的・論理的思考法，情報処理技術，コミュニケーション能力を身につけ，自ら学ぶことの喜びを知っている。
- 3 実践的で体系的な専門的知識と技能を身につけ，総合的な問題発見・課題解決能力を持っている。
- 4 職業観を持ち生涯学習し続ける能力を有している。
- 5 倫理観を持った市民として地域社会の発展に貢献する高い意識を持っている。
- 6 多様な言語・社会・文化を理解し，国際人として活躍する素地を持っている。

志學館大学のディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）（2023年度改定）

本学は建学の精神「時代に即応した堅実にして有為な人間の育成」に従い、その教育目標を実現することを目指し、以下に掲げる資質・能力を修得した者に学士の学位を授与します。

- 1 個性的かつ堅実な人間性，自主性，創造性が身についている。
- 2 人類の文化，社会と自然に関する豊かな教養と科学的・論理的思考法，情報技術，コミュニケーション能力を身につけ，自ら学ぶことの喜びを知っている。
- 3 実践的で体系的な専門的知識と技能を身につけ，総合的な問題発見・課題解決能力を持っている。
- 4 職業観を持ち生涯を通じて学習し続ける能力を有している。
- 5 倫理観を持った市民として地域社会の発展に貢献する高い意識を持っている。
- 6 世界の言語・社会・文化を理解すると共に，多様な人々と共生・協働できる素地を持っている。

2023年度 DP 改定に伴い 2024 調査から適用される設問

- | | |
|-----|-----------------------------|
| DP1 | Q1. 個性的かつ堅実な人間性，自主性，創造性 |
| DP2 | Q2. 人類の文化，社会と自然に関する教養 |
| | Q3. 物事を科学的に，論理的に考える方法や力 |
| | Q4. コンピュータの操作方法や情報技術 |
| | Q5. コミュニケーションの能力 |
| | Q6. 自ら学ぶことが楽しく，喜びであると感じる姿勢 |
| DP3 | Q7. 専門分野や所属する学科の専門知識や技能 |
| | Q8. 総合的な問題発見能力や課題を解決する能力 |
| DP4 | Q9. 仕事や働くことの意味についての自分自身の考え |
| | Q10. 生涯にわたって学習を続けていく意思や力 |
| DP5 | Q11. 倫理観 |
| | Q12. 地域社会の発展に貢献したいという気持ちや意識 |
| DP6 | Q13. 多様な言語・社会・文化に対する理解 |
| | Q14. 多様な人々と共生・協働できる素地 |

主たるカリキュラム改編, 各種制度の導入歴

適用	卒業初年度	概要
2018年度	2021年度	専門教育科目の再体制化 ・4学科とも専門教育科目に「学部基礎科目」群を置き「哲学」「倫理学」等を配置。その中に人間関係学部では、法学、政治学、社会学等を、法学部では「入門科目」群として各法入門科目と経営学科目を配置。
2020年度	(遡及) 2023年度	ESDプログラム導入 法学部学科分属制度導入
2023年度	2026年度	共通教育と専門教育の接続性の強化 ・卒業要件単位数の3部構成化。 ・共通教育に「導入科目」群, 教養科目に「教養基礎科目」群の設置。
2024年度	(遡及)	Society5.0基礎プログラム導入 教養基礎科目群に「ファイナンシャルリテラシー」配置。
2025年度	2028年度	人文学科及び法学部の新コース設置に伴う学科科目の整理。